世界の人と交流しようとする子どもを育てる外国語活動
～ コミュニケーション名人をめざして～

辻　伸幸

外国語活動の目的は、「コミュニケーション能力の素地を養う。」ことが、目的であり、外国語のスキル（リスニング・スピーキング・リーディング・ライティング・文法等）を習得させることがねらいではない。コミュニケーション能力の素地を養うための３つの大きな柱として、「言語や文化への体験的な理解」、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」、「外国語の音声や基本的な表現の慣れ親しみ」が文科省より示された。

以上の３つの柱を備え、コミュニケーション能力の素地を養う工夫として、「国際交流活動」と「外国語活動」の関連学習を１年間を通して実施してきた。この関連学習による学びの質の高まりを明らかにすることが、本研究の目的である。学びの質を明らかにしていくアプローチとして、学校研究提案が示している「自己」、「他者」、「対象」の３つの対話から考察することを採用した。

高い学びによってコミュニケーション能力の素地が築かれれば、世界の人と積極的に関わろうとする子ども達に繋がっていく。日本だけでは国が成り立たない21世紀に生きる子ども達の必要な要素である。

キーワード：外国語活動，国際交流活動，学びの質の高まり，コミュニケーション能力の素地

１．はじめに

平成23年度から新学習指導要領が完全実施され、外国語活動（原則は英語活動）が、小学校高学年（5、6年生）で年間35コマ必修化になる。平成21年度は、移行措置として、外国語活動を年間35コマまで指導してよいことになった。目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」ことである。

スキルの習得を目指して指導することは、比較的、容易である。しかし、小学生という発達段階を考慮すれば、スキル習得に重点を置く指導は、児童の外国語嫌いを増大させる危険性が高い。本格的なスキル習得を目指すのは、現状では中学校からの役割であろう。一方、コミュニケーション能力の素地を養うために、どのような指導方法が考えられるのであろう。今までに、言語スキル習得のための外国語教育でしか出会ったことのない小学校教員にとって難題である。その解決法の一つとして、「国際交流活動」と「外国語活動」の関連学習を筆者は提案してきた。

本研究では、学びの質をコミュニケーション能力の素地を養う視点から捉えようと試みた。学びの質の高まりを検証するために、「自己」、「他者」、「対象」の３つの対話から考える。学びの質を高める工夫として、「国際交流活動」と「外国語活動」の関連学習を採用した。

また、高い学びの質を保障していくために、辻(2009)の英語活動における授業展開プロトタイプを改良したものを活用していった。

なお、本研究では、使用する外国語を英語に焦点を当てて行った。従って、以後、「外国語活動」と同様の意味で「英語活動」という文言が使われていることがある。

２．外国語活動における学びの質の高まり

２．１　コミュニケーション能力の素地

吉田(2008)は、コミュニケーション能力の素地に関して次のように述べている。

> 英語活動を通して中学校や高等学校で求められるコミュニケーション能力を育成するための「素地」をつくることが最も大きな目標なのである。たとえて言うならば、建物の「基礎」をつくる前に、土地を整備しなければならないが、小学校英語活動は、その「地均し」の役割を負っていると言ってよいだろう。

具体的には、様々な人々と必然性のある英語を使ったコミュニケーション活動の中で、「通じたことによる

感動や満足感」、「笑顔で相手に挨拶を行い、プレゼントを渡したり、お礼の言葉を述べたりすることができる体験」、「コミュニケーションを取る上で、絵や実物、画像、ジェスチャー等の非言語コミュニケーションツールの使用」、「相手の言語や文化をもっと知りたいという気持ち」などが、コミュニケーション能力の素地に当たるものである。

外国語活動における学びの質は、以上挙げてきたコミュニケーション能力の素地を養うことと考えられる。

２．２　外国語活動における「自己」、「他者」「対象」における３つの対話

国際交流活動と外国語活動の関連学習でコミュニケーション能力の素地の充実を学びの質として捉え、「自己」、「他者」、「対象」における３つの対話で整理することができる。

外国語を通したコミュニケーション能力の素地を養うために、必然性のあるコミュニケーション活動を設定していくことが必要である。本研究では、必然性のあるコミュニケーション活動として、世界の人と交流する国際交流活動を設定した。以下に、それぞれの対話でどのような内容があるのか列挙する。

「自己」との対話
- 交流相手と何を伝え合うのか、その内容の吟味
- 進んでコミュニケーションを取ろうとする意欲
- 交流する相手を尊重し自分たちの考えたことを伝えようとする態度
- もっと上手に伝えたいと思う向上心
- 外国語が使えたという自己肯定感
- 交流が持てたことへの感謝

「他者」との対話
- 友だちとの対話
- アメリカのロン・クラークアカデミィの教員との対話
- 附属小学校の教員との対話
- 附属小学校の研究発表会に参加する全国からの教員との対話
- 和歌山大学大学生との対話
- 京都外国語大学学生との対話
- オーストラリアの交流小学校児童との対話
- ＪＩＣＡ大阪国際センターの研修員との対話

「対象」との対話
- 英語の音の慣れ親しみ
- 英語のリズムの慣れ親しみ
- 英語の語彙の慣れ親しみ
- 英語の表現の慣れ親しみ
- 英語の文字の慣れ親しみ
- 非言語のコミュニケーションツールの使用
- 日本語や英語への言語としての気付き
- 日本文化や外国文化の理解

これらの内容を、児童達が充実させ、伸ばしていくことができれば、質の高い学びができたということになる。

２．３　外国語活動における学びの質を探る研究方法

国際交流活動と外国語活動の関連学習で学びの質をコミュニケーション能力の素地の充実と考え、「自己」、「他者」、「対象」の３つの対話からどのような高まりが考えられるのか、すでに２．２で提案した。では、具体的にその高まりをどのようにして明らかにしていくことができるのであろう。具体的に述べていく。

一つは、指導者による直接観察法である。指導計画にしたがって単元や授業を展開していくが、その時々の児童の様子やつぶやき、行動を指導者の立場から観察することから学びの質の高まりを把握することが可能である。また、刻々と変化していく授業の中で、一人の指導者における直接観察法には、限界がある。したがって、それを補完する物が、ビデオ撮影、写真等から観察することである。

児童が活動に対して行う「振り返り」も有効な学びの質の高まりを確認できる方法である。この「振り返り」は、国際交流活動や外国語活動で行ってきた各々の活動に対しての積極性や満足度を３段階にして自己評価を行う。また、自分自身や友だちの積極性や卓越したところなど文章にして表現する方法がある。

授業や単元、年間の終わりなどに、相対的に４段階でそれぞれの２．２で挙げたような観点についてアンケート調査を行うこともできる。

外国語活動は、言語スキル習得を目標としない前提からリスニングテストやスピーキングテストを実施し、児童にその結果を示し、できなかったところを復習させるようなことはしてはならない。「自己」との対話の内容からも分かるように、興味、関心、意欲、態度などの心理的な観点が、外国語活動における学びの質の高まりとして入ることから、量的な検証ではなく質的な検証が必要である。

友達とさらに伝える内容を充実させ内容を伝える表現手段の工夫を行ったり、国際交流活動の相手と実際にを行ったりする。「対象」との対話では、外国語である英語への慣れ親しみ、言語以外のコミュニケーションツール（ジェスチャー、表情、絵や写真など）の工夫、交流相手の文化の気づきや理解、日本の文化や言語の気づきや理解などが考えられる。

２．４　学びの質を高める外国語活動の授業展開

英語を使った外国語活動で学びの質を高めるために、児童にとって負担が少なく、楽しくコミュニケーションの素地を養うところに至る授業展開を筆者は開発してきた（辻、2009）。本研究においても、その改良されたものを使用する。その流れは、以下に示す「ウォームアップ」から始まり「振り返り」に終わる授業展開である。

①【ウォームアップ】

外国語活動では、日本語とは異なる英語を使わなくてはいけない。したがって、精神的には不安な状態であり、ストレスも高いことが推測される。このような心的状況をリラックスさせたり、ストレスを低くしたりする大切な役割を果たすのがウォームアップである。

基本は、知的好奇心をくすぐるような短時間でできるゲームやクイズなどが非常に適している。

②【コミュニケーション活動場面の提示】

本単元や、授業のコミュニケーション活動の場面を、児童達に提示して見通しを持たせるところである。指導者によるデモンストレーションやビデオで提示すると効果的である。

③【聞くことに慣れ親しむ活動】

外国語活動において、最初の段階は、聞くことに重点を置くことが大事である。日本語とは大きく音声面が違う英語をクイズや歌、教師によるデモンストレーション、ICT などを駆使しながら楽しく聞くことにのみ特化した活動で十分に慣れさせる時間が必要である。

④【発音することに慣れ親しむ活動】

聞くことに慣れ親しむ活動の次にくるのが、発音することに慣れ親しむ活動である。日本語の発音とは大きく異なる英語を発音するための口慣らしの段階である。

単純なリピーティングではなく、ゲーム的で遊びを取り入れた発音練習を行うことが、必要である。例えば、チャンツなどは、十分、活用できる。テンポやリズムを自由に変化させることのできる電子キーボードやメトロノームはチャンツに最適である。

⑤【準コミュニケーション活動】

語彙や表現に十分慣れ親しんでいても、いきなりオーセンティックなコミュニケーション活動を導入すると児童たちには、負担が大きくなる。このギャップを埋めるために、コミュニケーション活動の橋渡し的活動を組み入れることを推奨したい。学級内で擬似的なコミュニケーション活動を取り入れるのである。

例えば、シミュレーションがある。本単元では、オーストラリアの交流している友だちにクイズを出し合うことが最終目標でオーセンティックなコミュニケーション活動である。

⑥【コミュニケーション活動】

外国語活動で、外してならないのがコミュニケーション活動である。英語に慣れ親しむだけでは、コミュニケーション能力の素地を養うことにはならない。実際の生きたコミュニケーション場面で、慣れ親しんできた表現を使用し、通じた喜びや分かり合える感動を得ることができる。このような経験を積み重ねる中で、進んでコミュニケーションを取ろうとする積極的な態度の育成に繋がると考えられる。

⑦【振り返り】

児童の一人ひとりが、今日の活動を振り返る活動である。「ウォームアップ」、「聞くことに慣れ親しむ」、「発音することに慣れ親しむ」、「準コミュニケーション活動」、「コミュニケーション活動」の自己評価や他者評価をする。

３．学びの質を高めた外国語活動の展開例

ここでは、アメリカのロン・クラークアカデミィの教員との国際交流活動を例に、5 年生児童による学びの質を高めた外国語活動を紹介する。

コミュニケーション能力の素地を拡げる目標段階がコミュニケーション活動であり、その一つに、アメリカのロン・クラークアカデミィの教員７名との交流である。

単元は、「自己紹介をしよう」であり、全７時間計画（図 1）で実施した。自己紹介をすることは、日本人を含め世界の人と交流する上で、必要不可欠なものであり、コミュニケーション能力の素地の根幹とも言える。

本単元では、自己紹介をする上で、児童達は、あらかじめ自己紹介ポスター（写真 1）を作成しており、自分の好きな食べ物、スポーツ、教科、テレビ番組、歌、動物の画像を貼っている。事前にこのような自己紹介を英語でするときの助けになるものを準備させることが、児童への大きな支援となる。例えば、何について自己紹介するのかが自分でも、目で見て確認しながらできるので、児童への情意フィルターを低めることができ、安心してできる。また、自己紹介を受ける側も、視覚的な情報があるので理解しやすくなる。さらに、自己紹介ポスターを介して、質問などのやりとりもスムーズにすることができる。

第1時	自分の名前
第2時	自分の好きな食べ物
第3時	自分の好きな動物
第4時	自分の好きな歌・テレビ番組スポーツ
第5時	自分の好きなスポーツ
第6時	ジョン・クラークアカデミィ教員と交流
第7時	附属小学校教員に自己紹介

図1

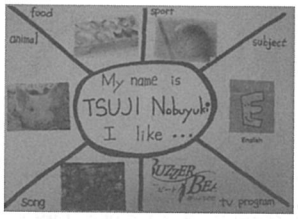

写真1

写真2

第1時から第5時までは、英語で行う自己紹介に使う時に必要な語彙や表現に慣れ親しむ段階であった。2.4 で示した授業展開に沿って、児童達は「ウォームアップ」と「コミュニケーション活動場面の提示」を授業の初めに体験し、次に、「聞くことに慣れ親しむ活動」をかるたゲーム（写真 2）やカードゲーム、ビンゴゲームなどで活動した。次に、「発音することに慣れる」で、メトロノームのリズムに合わせて発音に慣れ親しんだ。また、毎回ではないが、イギリス人のネイティブスピーカー講師や和歌山大学生に自己紹介の練習相手になってもらいシミュレーションを行った。

第6時では、ロン・クラークアカデミィの教員7名を教室に迎えた。緊張をほぐすためにも、いきなり自己紹介を行うのではなく、自己紹介に使う表現を使ってのチャンツやゲームで復習を取り組んだ。楽しく慣れ親しみ、緊張が和らいだところで、児童達は7つの小グループになり、各グループにアメリカ人の先生に入ってもらい、児童達が順番に自己紹介をしていった（写真 3,4）。

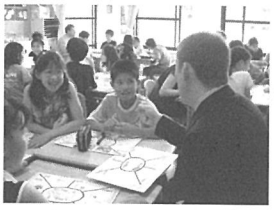

写真3

写真4

4．外国語活動の展開例の考察

ここでは、3 で紹介した外国語活動の展開例の考察を 2-2 で分類した学びの質の高まりを見る 3 つの対話から考える。

「自己」との対話では、自己紹介で何を伝えるのか考え、単元が進むにつれて、もっと上手にしようとする姿勢が、授業中の直接観察、ビデオ、写真から確認することができた。また、英語を使って自己紹介をすることができたという満足感、成功感、成就感をその後の振り返りで児童自ら感じていることが分かった。また、交流をする機会を与えてくれたロン・クラークアカデミィの教員の方々に感謝の意を表すこともできていた。

「他者」との対話は、まさしくロン・クラークアカデミィの教員との国際交流活動である。ロン・クラーク氏は、かつて全米最優秀教師として選ばれ、その後、アトランタに自分たちの学校であるロン・クラークアカデミィを創設した人物である。国際交流活動を目的に附属中学校に生徒を引率してきた機会を捉えて、教員の方々に授業に協力していただいた。

「対象」との対話では、2-4 で示した授業展開により英語における音、リズム、語彙、表現に十分、慣れ親しむことが無理なくできた。さらに、非言語のコミュニケーションツールとして、アイコンタクト、笑顔、画像などの使用など有効に使うことができ、コミュニケーション能力の素地を拡げることにつながった。「対象」との対話においても授業中の直接観察、ビデオ、写真から確認することができた。

5．成果と課題

外国語活動の目標である「コミュニケーション能力の素地」を養うためには、コミュニケーション活動が絶対不可欠である。しかも、英語でコミュニケーションを取ろうとする必然性が、必要であり、「他者」との対話がオーセンティックなものであると、学びの質が高まることが明らかになった。さらに、「他者」との対話を充実させるためにも、「自己」、「対象」との対話が充実していなければならないことが、改めて確認することができた。このような高い学びの質を保障することができる一つのアプローチが国際交流活動であろう。

新学習指導要領が完全実施されるまでに、質の高い学びを保障できるコミュニケーション活動の開発（「他者」との対話の充実）が、これから必要である。また、それを支える活動（「自己」、「対象」との対話が充実）も開発が望まれている。

参考文献

辻伸幸．(2009)．「小学校英語活動における授業展開のプロトタイプ開発」．『和歌山大学教育学部紀要　教育科学』第 59 集．125-130

吉田研作．(2008)．「第 2 章　学習指導要領外国語活動の徹底理解」．『21 年度から取り組む小学校英語』．吉田研作（編）．62-63．教育開発研究所．